

中欧と東南アジアにおける水難怪異伝承の比較研究 —水辺の「社会性」を軸とした事故防止教育の構築にむけて—

永原 順子（大阪大学大学院 人文学研究科 日本学専攻）

1. 研究の背景と目的

水難事故防止教育において、地域に根ざした「怪異伝承」は、子どもの行動を抑止し生存の知恵を伝える伝統的なナラティブ（物語）として機能してきた。発表者はこれまで、日本および東南アジアを対象に、水難怪異伝承をいかに現代の防災・減災教育へ社会実装するかについて研究を重ねてきている。

本発表では、このアジア圏での知見をベースに、中央ヨーロッパ（中欧）へと視野を広げる。2026年春、スロバキアの大学生を対象に実施したWeb講義と聞き取り調査の成果を踏まえ、中欧の代表的な水霊「ヴォドニーク（Vodník）」とアジアの水難怪異を比較分析し、地域特有の自然観が現代の事故防止教育に与える影響と、新たな水難事故防災教育への可能性について試論を展開する。

2. 中欧の怪異「ヴォドニーク」の特徴と社会的変容

中欧のスラブ語圏全域に伝わるヴォドニークは、日本の動物的な「河童」とは異なり、緑色の燕尾服をまとった「大人の男性」や「男爵（Baron）」として擬人化され、独自の家族構成を持つなど、高度な社会性・階級性を有している点が特徴である。

スロバキアの学生への聞き取り調査からは、現代におけるヴォドニークのリアルな立ち位置が浮き彫りとなった。現在、スロバキアでは河童のような視覚的な「危険警告看板」にヴォドニークが使われることはなく、主に児童書や”Jak utopit Dr. Mráčka aneb Konec vodníků v Čechách”「ムラーチェク博士を溺れさせる方法」（1974年）のようなコメディ映画、あるいは言葉遊び（詐欺師を意味するポドヴォドニーク）といった日常の様々な文化表現の中に生存している。しかし同時に、多くの学生が「幼少期に祖父母や本からヴォドニークの話聞かされ、水辺の危険を学んだ」と回答しており、内面化された抑止力としての機能は根強く残っていることが確認された。

3. 東南アジア・日本との比較：二つの「脅威のナラティブ」

本報告では、怪異が持つ性質を「動物性」と「人間社会の模倣（社会性）」の観点から対比する。日本の「河童」や、フィリピンの「ショコイ（Syokoy）」のような水難怪異は、その多くが野生の生物に近い「動物的」な特徴を有している。これに対し、中欧のヴォドニークは、水中の館に住み、家族を持ち、「男爵」という階級社会の肩書があるなど、人間の社会システムを反転・模倣した「社会性」を持っている点が決定的に異なる。この「動物的な野生の脅威（アジア）」と「人間と同様の社会秩序を持った男爵（中欧）」という怪異の在り方の違いは、それぞれの文化圏が水辺という異界をどう捉え、言語化してきたのかという自然観の差を鮮明に示している。

4. 結び

本研究の知見は、現代の防災教育に2つの示唆を与える。第一に、東南アジア的な「野生・自然への根源的な畏怖」を伝えるアプローチと、中欧的な「境界線のルール遵守」を求めるアプローチの双方を組み合わせることで、より多角的なリスク・コミュニケーションが可能になる点である。第二に、中欧においてヴォドニークは看板等に採用されることはなく、主に親や祖父母からの「口承」によって家庭内で語り継がれ、それが児童書やユーモアある文化表現へと繋がっている点である。警告標識に依存せずとも、身近なナラティブ（物語）として内面化された怪異伝承が、今なお若者たちの水辺における生存本能を刺激する有効な枠組みとなり得ることを示している。これらを踏まえ、国境を越えた水難事故防止教育の共通言語の構築に向けて今後も調査研究を続けたい。

[謝辞] 本研究は、株式会社坂本技研との共同研究「学際的視点を持たせる地域連携教育研究」の成果によるものです。この場を借りて深く御礼申し上げます。